
曹徳の奮闘記

零戦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曹徳の奮闘記

【Nコード】

N2622Z

【作者名】

零戦

【あらすじ】

乗用車にひき逃げをされて気がつけば、真・恋姫＋無双の曹操の弟として生を受けて、イジメられながら育つが遂に家出をした。

真・恋姫＋無双（改）の改訂版になります。

別枠で投稿した方がいいと言われたので、新たに新規投稿をします。

テイルズキャラも出します。

多分ハーレムになります。

第一話（改）

「曹徳、その部屋を掃除しときなさい」

「……………はい」

母親の曹嵩に汚物を見るような目で見られながら俺はグチャグチャになった宴会後の部屋を掃除していく。

「……………あら？曹徳はまた掃除なのかしら？よっぽど掃除が好きなのね」

掃除をしていると貧乳のクルクルドリルが特徴の曹操とお供の夏侯惇と夏侯淵がやってきた。

「……………それが仕事なのですよ」

「あらそう。ならついでに厠も掃除しといてね」

曹操は興味なさそうに言い、夏侯惇も先程の曹嵩同様に汚物を見るような目で俺を見て、二人は何処かに行く。

唯一、夏侯淵は申し訳なさそうに俺に頭を下げて部屋を出た。

「……………さて、片付けるか」

俺は皿などの片付けにかかる。

そろそろ俺の自己紹介をするか。

俺の名は曹徳で親は曹嵩、姉は曹操や。

え？頭を打ったて？いやこれが冗談とちゃうねんな。

俺は平凡なサラリーマンやった。（ただし、予備自衛官でもある）

そんなある日、仕事が終わって帰宅途中に乗用車に引かれてんな。

そして気がつけば、昔の中国ぽい家にいて姿は赤ん坊やった。

そして母親が曹嵩と知った時は驚いたな。

歴史は好きやったから三国志もある程度は知っていた。（横山三
国志やけど……）

でも、もっと驚いたんが姉が真・恋姫の曹操やった事やな。

ただし、義姉らしい。

俺も詳しい事は分からんからな。俺は捨て子でそれを曹嵩が拾ったとか使用人達が話しているのを盗み聞きして得た情報やし。

曹操は正に天才で、十年の一人の逸材らしい。

対する俺は、平凡な大学を出たサラリーマンやったので、知能は

普通。

曹操同様に期待していた曹嵩は俺に落胆して、教育の全てを曹操に注がせて俺は雑用の仕事ばかりさせてきた。

「……こんなもんやな……」

俺は綺麗にした部屋にふうと息を吐く。

さて、部屋に帰って読書するか。

俺の部屋は廁の近くにある物置に近い部屋やった。

「……………」

俺が読んでいるのは薬草の本やな。

何でそんな本を読んでいるのかというと、もうすぐこの家を出るからやな。

このまま家におつたら近いうちに俺は死ぬわ。全身痣だらけやしね。

そのために、野宿する際に食べれるきのみや薬草を勉強してんねんな。

え？盗賊に襲われる？

まあそうやるな。でも先日、武器庫の片隅に何故かこの時代には無いはずの日本刀があってんな。

しかも二本あって、うち一本は何でか小太刀やし。一応、予備自衛官をやっていたからある程度は戦える。

路銀もかなり貯めている。

「ま、それより今は勉強だな……………」

勉強は遅い時間までやった。

そして十日後、俺はとうとうこの家を出る事にした。

正直、曹嵩のイジメには耐えられなかったな。（よく十二年も耐えてたわ。あ、歳は十九ね）

皆が寝静まった夜中、俺はこっそりと塀を乗り越えて着地した。

「さて、追っ手が来る前にちゃっちゃんと逃げよ」

一応、旅の商人の恰好はしてるけどな。（それ用の服は買っている）

「……俺を育ててくれてありがとう。じゃあな、俺をイジメた人達よ」

俺は生家に御礼を言い、曹嵩達への言葉を言って夜の闇の中に消えた。

翌日、曹徳が消えた事を知った曹嵩は「育ててやった恩を忘れおつたな曹徳ッ!!」と激昂して見つけ次第打ち首にしろと命令をして曹徳の搜索を開始した。

しかし、曹徳は一向に見つかる気配はなかった。

「……曹徳様……」

私は搜索隊を率いる中、思わず溜め息を吐いた。

曹徳様の行方が分からなくなって既に三日が経過していた。

私が初めて曹徳様にお会いになったのは七つの時だった。

姉者は華琳様に付きつきりだったが、私は何故かよく曹徳様と遊んでいた。

しかし、曹徳様が華琳様より普通だと知ると途端に私の両親は曹徳様に近づく事を禁じた。

皆は曹徳様を普通だと言うが私はそうは思わない。

曹徳様は華琳様とはまた違う逸材だと私は思つ。

曹徳様……ご武運を祈ります。

曹徳のために夏侯淵は曹徳の武運を祈つた。

「さて、何処に行こかな……」

確か董卓は涼州におつたな。

それに董卓軍は俺の嫁（笑）の華雄がおつたしな。

「よし、涼州に行くか」

俺は涼州に向かった。

第一話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm（――）m

第二話（改）

「……やっと涼州に着いたな……」

流石に徒歩で涼州まで行くのはしんどかったなあ。

「とりあえず、宿に入って疲れを癒したいわ」

山賊とか盗賊に出くわして、身体から血の臭いがしてるしな。

「ん？」

何か人だかりがあるな。

「ちょっとすみません」

人だかりの中に入っていくと、董卓軍兵士の募集のおふれが出ていた。（姜族が暴れているため）

「募集は明日の正午までか……」

募集の場所は城か。とりあえず宿で一夜を過ごせるな。

「宿に行こ」

一夜を過ごしてから募集に応募するか。

路銀が少なくなってきたからな。

その後、宿に入って血の臭いとかを洗い落したりして備えられたベッドに倒れた。

——翌日、董卓の居城——

「すみません、兵士募集で来たんですけど………」

受付のところで募集の場所を聞いて行くと、そこは訓練所みたいなところやった。

「む？新しい希望者か？」

訓練所には俺の嫁がおった。

「はい。ところで後ろの人の山は？」

「ん？訓練で鍛えていたところだ」

………はあ。

「私は董卓軍の将の華雄。後ろで酒を飲んでいるのは同じく将の張
遼だ」

「よろしゅうなあ」

張遼が酒瓶を上にあげる。

「はあ」

「試験は私に一本でも入れたら勝ちだ。これを貸す」

華雄から刃を丸めた剣を渡される。

「あ、ども」

「何か質問はあるか？」

「そつやなあ。俺が勝つたら華雄と張遼は俺の嫁でおK？」

「……………」

あの、黙らないで下さい。

「……………一瞬で片付けてやる……………」

「あかんで華雄、それは死亡フラグやねんけど……………」

「黙れエエエーッ!!」

華雄が襲い掛かってくる。

俺は迫り来る金剛爆斧こんこうばくふをなんとかギリギリで避けた。（いやマジでギリギリ）

「ほう……よく避けたな」

「そんなヘナチヨコな太刀筋やったら余裕で避けれるわ」

「な、何だとオッ!!」

「（よし、怒ってる怒ってる）」

俺の挑発に華雄は怒り狂い振りかぶって、金剛爆斧を振り下ろした。

俺は太刀筋を見て、なんとか避ける。

「なッ!？」

「今度はこっちやッ!! 虎牙破斬ッ!!」

華雄を下から斬り上げて、威力は弱め肩を叩いた。

ぶっちゃけテイルズですはい。

せめて何か出来ないかと思って、昔から身体を鍛えながら練習していたんや。

今のところは虎牙破斬と閃空裂破が出来る。

他は修業中やな。（てか技もあまり覚えていないしね。この二つだけは何でか覚えていた）

「ぐッ!!」

華雄が地面に叩きつけられた。

「ほら一本取ったで？」

「…………私の負けだ…………」

…………これで勝ちやな。

「ああ。それと嫁の件はあんたを挑発するためやからな」

「何ッ!？」

「まあ俺としては嫁でもええんやけどな」

「むむむ……………」

唸るなよ華雄。

「あんさん、中々やるなあ」

「まあ、此処に来るまでに山賊や盗賊と死合いをしてたからな」

「成る程な。兵士としては採用や。多分、兵士というより一部隊をやるかもな」

「えゝ（´Д、´）」

「何で、嫌そうな顔すんねん」

「だって、部隊長になったら酒とか飲まれへんやん」

「……………あんたは仲間やツ！！」

何故か張遼に手を握られた。

「ウチも酒が生き甲斐やのに賣クつちは酒を取り上げるねんで……………」

「そらぁ苦労したな」

「ほんまやで。あ、そついやまだ名前を聞いてなかったな」

……………忘れてたな。流石に曹徳はあかんしなぁ……………。

……………そつや。

「俺の名前は姓は王、名は双や」

まあ偽名でも大丈夫やろ。

「ウチは張遼や」

「よろしくな張遼」

「ああ、よろしくな王双」

それにしても、華雄に勝てるとはな。まあ挑発で華雄を怒らしてやけどな。（普通なら負けるしな）

華雄はゲームでも関羽に討たれてるけど、猪突猛進を無くしたら化けると思うねんけどな。

「そうや王双。賣クっちに会わへん？」

「何でや？」

「王双つちやつたら一部隊の隊長にいけるからな。酒とか冗談抜きで」

……流石は將軍で事かな？

「いや、普通に路銀を貯めてから旅に行こうかなあと思ってたんやけどな」

「へえ、そうなんか。なら、貯めるまでおつたらええやんか。客将とかで」

……そんな呑気でええんやろか？

「ほらほら、ちやつちやと行くで」

「わ、分かったから押すなよ張遼」

俺は張遼に押される感じで賣クの場所に向かった。

第二話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm（――）m

第三話（改）

「コイツを一部隊長に？却下よ」

「……ほらな」

「何でや賣クつち」

張遼に連れられて賣クの元に来たけど、あえなく却下となった。

「いきなりアタシのところに来たと思えば、ただの一般兵士を一部隊長にしろって……あんたまた酒を飲んでるんじゃないでしょうね？」

「酒は飲んでないわ賣クつちッ！！な、ならウチの部隊に入れてええやろ？」

「……それならいいわ」

「流石賣クつちや」

そらあ、張遼の部隊に入れるんなら問題はないからな。

「ほんじゃあな賣クつち。ほら王双も行くで」

「分かった分かった」

俺は引つ張られながら部屋を出た。

「……一体、何なのかしら？」

一人だけになった部屋で賣クはそう呟いた。

「それじゃあウチの副官をやってな」

「仕事は俺に任して、自分は酒を飲むんか？」

「ギクギクッ！！Σ（。Д。）」

そら分かるわ。

「で、副官の仕事は何をすんねん？」

「ま、まあウチの補佐役やな。主に書類が多いけどな」

「ならさっさとして酒飲もうや」

「それもそうやな」

こうして、ただの一般兵士の募集に來ただけなのに、何故か張遼の副官をやらされる事になった。

数日後、俺は何となくやけど副官の仕事を覚えてきた。

まあ張遼がよく逃げ出すのを防いでるけどな。

「そうや王双っち。明日は戦やで」

「ああ。だからその準備をしてんねん」

明日から、暴れている姜族を鎮めるために出発すんねんな。

「どうや？初出陣の前祝いに飲むか？」

「阿呆か。酔っ払ってたらやられるやろが……」

「ウチは大丈夫やけど……」

「それは張遼だけや」

俺は溜め息を吐いた。

翌日、張遼隊と華雄隊五千名は出発した。

俺には人生初めての大規模な戦いやな。

涼州に来るまでは盗賊や山賊と戦ってきたけど、今回は違っな。

「何や王双っち、緊張しとんのか？」

張遼が聞いてきた。

「ああ。人生初めての大規模な戦いやからな」

「そうなんか。まあ馴れたら後は普通やで」

「そうか……………」

そして、俺達は戦場に到着した。

「相手は姜族やッ！！油断すんなよッ！！」

「全軍突撃イイーーーーッ！！」

『ウワアアアアアーーーーッ！！！！』

一斉に兵士達が姜族に駆け出した。

「行くで王双っちッ！！」

「あ、ああ」

まだ乗馬の練習は三日してないけど、何とか馬を操って俺も戦場に突撃した。

ザシュッ！！

「ギヤアアッ!!」

兵士が腹を剣で切り裂かれ、腸が露出する。

また、ある兵士は首を斬られて、斬られた箇所から血が噴水のよう
に噴き出す。

四肢のどれかを斬られて倒れる兵士や姜族……。

……これが……。

「……これが戦場なんやな……」

現代やと銃撃戦とかやけど、これは記憶に残るな。

それでも吐き気はしない。

理由としては、涼州に来るまでに数回、山賊や盗賊達と戦って死
体を何回も見てるからやな。

しつこい説明やけど気にするな。

「ウオオリヤアアッ!!」

槍を持った姜族の兵士が俺に突撃してくる。

「ハアッ!!」

ザシュッ!!

俺は槍を切って、兵士の首を斬る。

血が噴き出して俺に降り懸かる。

「ウオオリヤアアッ！！」

また来た。

「ウオオオオッ！！」

俺は斬られないように避けて、相手の命を奪っていく。

「ん？」

ふと人ばかりを見ると、張遼が姜族の兵士に囲まれていた。

「ちいッ！！」

俺は人だかりに走った。

俺の接近に気づいた姜族の兵士が槍や剣を構えた。

「どけえええッ！！」

俺は叫んで兵士を斬っていく。

「王双っちッ！？」

「無事か張遼ッ！！」

何とか囲みを斬っていくと、切り傷がありながらも孤軍奮闘している張遼がおった。

「ありがとな王双っち。ハアアアッ!!」

張遼が俺の突撃に怯んだ姜族の兵士達の隙について切り捨てていく。

「ヒイイイツ!!」

遂に、姜族の兵士達は囲みを解いて逃げ出していく。

「……助かったで王双っち……」

「無事でよかったわ張遼……」

まあ將軍が死んだら部隊は終わるからな。

………ん?

「張遼ッ!!」

俺は近くの岩に何かが動くのを見つけた瞬間、俺は張遼を抱いた。

「お、王双っちッ!？」

張遼がいきなりの事で顔を赤くしているが、知らん。

ドストスッ!!

軽い衝撃が来た。

「……華雄ッ！！お前の近くの岩に伏兵やッ！！」

「分かったッ！！」

岩の近くにいた華雄に向かって叫び、華雄は弓を持った伏兵を切り捨てた。

「……これで大丈夫やな……」

「ッ！？王双っち、怪我……」

張遼が俺の背中に打ちつけられた矢を見た。

「医師は何処やアアアアッ！！」

張遼の叫び声を聞きながら、俺は意識を失った。

第三話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしていますm（――）m

第四話（改）

「……………」

俺は目を開けると、そこは天幕の中にいた。

「…………知らない天井や……………」

天幕やねんけど、俺自身は俯せのような状態（コナン映画で負傷した阿笠博士みたいな格好）で寝ていたんやな。それとここは天井や。これ重要な。

「……………ん？」

左手が何か掴まれているな。

「…………張遼……………」

張遼が俺の左手を握りながら眠っていた。

「おやおや。目が覚めたようじゃな」

医師が入ってきた。

「ホッホッホ。お熱いのう」

「い、いやこれは……」

張遼から手を離そうにもガッチリと掴まれている。

「張遼將軍はお主の手をずっと握っておったわい。先程まで華雄將軍もいたが戦の後処理をしており」

「……戦はどうなったんすか？」

「意外にも姜族は強かったが、辛勝と言ったところかのう。死傷者も約三千名を数えておるからしばらく滞在してから帰還するみたいじゃ」

激戦と言ったところやろか。

「……ん……」

あ、張遼が目を覚ました。

「……王双っちッ!!」

「うわッ!？」

張遼が俺が起きてるのを見ると、いきなり抱き着いてきた。

「よかった……ほんまよかったわ王双っち……」

「……どういふ事や？」

俺は思わず医師に助けを求めた。

「お主が当たった矢には毒が塗られていたんじゃないよ」

「…………マジ？」

「本気と書いてマジじゃ」

まさか毒矢とはな…………。

「ほんまに心配してんからな」

よく見ると、張遼の目元に涙の跡があった。

「…………悪いな張遼…………」

「やっと後処理が終わった。張遼、王双は目を…………王双ッ!!」

天幕に華雄が入ってきて、起きてる俺に驚く。

「目を覚ましたんだな」

「ああ。大分迷惑をかけたみたいだな」

「全くだ。張遼隊の業務もやらされたんだ」

「それはスマン…………」

「それに貴様が死んだら、また貴様と戦えないからな」

……それが狙いかよ。

「それはちゃんとしたるわ」

「うむ。約束だ」

……何か華雄の死亡フラグが立ったような気が……。

「そろそろ診察したいからいいかの？」

医師の言葉に張遼が慌てて俺から離れた。

それから三日間は部隊の休息を兼ねて、付近の村々の治安維持をして帰還した。

それから数日後、俺は董卓軍の兵士を辞めた。

「何で辞めんねん王双っちッ!!」

賈クに辞表を提出して部屋の整理をしていたら張遼と華雄が入り込んできた。

「いやだって……元々軍に入っただんなは路銀を貯める事やったからさ。二人かて知ってるやろ」

「そ、そりゃあそつやけど……」

「しかしな……」

何か釈然としない二人。

「大丈夫や。二人に何かあったら直ぐに飛んで帰ってくるな」

「……………」

二人は溜め息を吐いた。

「分かった分かった。んじゃあウチら危なかったら助けにきいや？」

「ああ。そつや二人に真名を預けるわ」

「……………いいのか？」

「ええよええよ。俺の真名は長門や」

本当は真名を貰われへんかったけど、長門は前世の名前やったからな。

「ウチの真名は霞や」

「私の真名は桜花だ」

え？華雄に真名つてあったんか？

「私が真名を預ける条件は私より強い奴なんだ。一度だけとはいえ、王双……長門は私を倒したんだ。だから真名を預ける」

そうやったんか…………。

「ああ。預からせてもらっわ桜花、霞」

「次会ったら飲むで」

「それもええな」

そして、霞と桜花と分かれて涼州を後にした。

「さて、次は何処に行こうかな……………」

巨乳が多い呉に行こうか。確か周瑜は病気があつたな。

「あれはどうやって治すか……………」

ま、今考えて仕方ないな。

「とりあえず、行き先は呉に決定やな」

「……はあ……しんど……」

俺は今、馬に乗っていた。

流石に馬無しでは足が持たないから途中の町で、馬商人から馬を一頭購入した。

「馬やと楽やわあ……」

ビュンビュンッ！

ドストスッ！

「ヒヒーンッ！？」

「うわッ！？」

な、何やッ！？馬がいきなり暴れだした……て、尻のところに矢が二本やて？

「ヒヒーンッ！！」

「うわッ！？」

俺は投げ出されたけど、咄嗟に受け身をとって傷はなかった。

「へっへっへ……」

すると、草むらから十数人の山賊か盗賊と思わしき奴らが現れて、俺の周りを囲んだ。

「兄ちゃんよ。有り金と服は置いてってもらおうか？」

「……フッフッフ。だが断るッ!!」

こらそこ、ジヨジヨとか言っな。

「なら死んでから奪うまでよッ!!」

盗賊達はそう言って俺に襲い掛かる。

「お前らが死ねッ!! 閃空裂破ッ!!」

『ギヤアアアーッ!!』

一斉に襲い掛かろうとしていた盗賊を閃空裂破で倒す。

「な、何だコイツはッ!!」

「お頭を呼んでこいッ!!」

「まだ終わつとらんでッ!! 虎牙破斬ッ!!」

「グエッ!!」

俺は虎牙破斬で盗賊を倒し、囲まれたら閃空裂破で脱出する。

「何をやっているッ!!」

その時、正面に大金棒を持った女性が現れた。

……あれって確か……。

「私は魏延、字は文長だッ！！潔く死ねッ！！」
あざな

魏延は俺にそう言った。

第四話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm（――）m

第五話（前書き）

若干無理矢理感と歴史改変です。

テイルズキャラは袁術ルートに入ってから出そうと思います。
勿論ヒロインキャラですね（キラ）、ω、（

第五話

「私は魏延。あさな字は文長だッ!! 潔く死ねッ!!」

魏延はそう言っとて跳躍して鈍砕骨どんさいこつで俺を叩こたたうとするが俺は避ける。

ドゴオオンッ!!

衝撃で近くあつた岩が砕けた。

「次行くぞッ!!」

「うわッ!!」

ドゴオオンッ!!

何とか、魏延の攻撃を避けていくけどいずれはやられそうやな。

.....なら.....。

「突撃やッ!!」

「フ、潔く死ぬ気になったかッ!!」

魏延が鈍砕骨を振り下ろそうとする。

「だから死なんわッ！！虎牙破斬ッ！！」

「グウッ！！」

俺は峰打ちでやる。

「まだまだアッ！！」

俺は連続で虎牙破斬を叩き込んでいく。

「……グフッ！！」

そして遂に魏延が倒れた。

「お、お頭がやられたーッ！！」

「に、逃げるオーッ！！」

生き残っていた盗賊達は一目散に山に逃げていった。

「……はぁ……」

俺は溜め息を吐いて、魏延を背負って近くの小川に連れていった。

「……………」

あ、魏延が目を覚ましたな。

「お？傷はどうや？」

「き、貴様は…………グウッ！！」

魏延が起き上がろうとするけど、傷の痛みで倒れた。

「無理して起き上がるからや」

俺は魏延の身体に触れる。

「…………や…………あ……………」

ん？魏延が急に顔を真っ赤にしたな。

「…………やめろ…………私の…………肌は…………敏感なんだ……………」

ああ、確かゲームでもそうやったな。

…………でもそれは無視やな。何故なら俺の目の前には魏延のオツパイがあるからな。てかマジパネえ…………。

「……………」

魏延は俺の視線が何処にいつているのに気づいたんか、顔を青ざめながら強く左右に首を振る。…………しかも上目遣いときたよ。

でもな魏延……。

$$\begin{array}{c} \triangle \\ \equiv \\ \triangle \\ \equiv \\ \triangle \\ \equiv \\ \triangle \\ \equiv \\ \triangle \\ \equiv \\ \circ \end{array}$$

「やあッ！……はあんッ！……アアアアアアアア——ッ！！」

「……やべ、やり過ぎたか……」

魏延は敏感とオツパイを揉まれた事実に耐えられずに気絶をした。だつて目の前にオツパイがあつたからなあ。

ま、魚でも釣って食べるか。

「……ほんまにスマンかった」

再び起きた魏延に俺は土下座をしている。

「……いい。もう過ぎた事だ」

魏延は顔を赤くしている。

「もう私は盗賊には戻れない。だからお前についていいか？」

「ええんか？」

「いいよ。それに……責任取れよ。私にあんなのさせて……」

「あ、ああ……」

いやあ、魏延のオツパイは柔らかかったからなあ。

とまあ、魏延を仲間？にする事が出来た。

「それでこれから何処に行くんだ？」

「今のところは孫呉でも見に行こうかなと思ってるわ」

「ほう孫呉か……」

確か孫堅が黄祖に討たれるからな。

それを阻止してみるか。

「んじゃ、孫呉へ出発やな」

というわけで孫呉の長沙に着いたわけなんやけど……。

「兵士として参加するのか？」

「いや、軍団の後ろに隠れながら付いていくわ」

「何でだ？」

「……どう説明しよか………そうや。

「いや実はな、焰耶（真名は許してくれた）と出会っ前に管輅とかいう占い師に言われたんや。『孫堅を守らねば貴様はまともな人生を歩めない』てな」

「……嘘っぱいな………」

「俺も最初はそう思ったで。でも管輅は雷や雨で増水した川が氾濫する事を予言して見事に当てたからな。んで俺は信じてみる事にしたんや」

「成る程なあ………」

俺と焰耶は長沙の町並みを歩く。

「とりあえず、宿を取って孫堅軍が動くまで待つしかないな」

それから三日後、孫堅軍が襄陽へ向かったのを聞いて俺と焰耶は孫堅軍を追った。

「…………あれが襄陽やな……………」

「それであれが孫堅軍と……………」

俺と焰耶は近くの林で隠れていた。

「今のところは何もないな」

「ん？おい、襄陽の門が開いたぞ」

確かに門が開いていた。

「孫堅軍に行くぞ」

「分かった」

俺と焰耶は孫堅軍の陣営に向かった。

第五話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm（――）m

第六話（改）（前書き）

今回はご都合が出ます。

マイソロシリーズでアイテムを取る箱……。

第六話（改）

「……………なんだかなあ……………」

「どうしたんだ長門？」

不審に思った俺に焰耶が声をかけてくる。

「あの箱の中身を見てから急に態度が怪しいぞ」

「いや大丈夫やねん」

「ならいいが……………」

実は、孫堅軍を追っている最中にとある箱を見つけたんやな。

その箱がなあ……………ティルズのマイソロシリーズに出てくる道具箱にそっくりやってんなあ。

んで、箱を開けたら一冊の本があった。

本の中身はファーストエイドやリカバーなどの呪文の仕方が書いてあってんな。

何で恋姫の世界にティルズのがあったのかは不明やけどな。

「ん？」

何か孫堅軍が騒がしいな。

あ、単騎で誰かが山の方に向かったな。

「多分、あれは孫堅やろな」

「……普通、大将は単騎で飛び出すか？」

まあ孫策の親やからな。

「とにかく追うで」

「ああ」

俺と焰耶は孫堅を追った。

「ちいッ！！畏だつたわねッ！！」

私はそう叫びながら黄祖の伏兵を斬り倒していく。

「もらったッ！！」

「なッ！？」

伏兵に隠れていた黄祖が私に斬り掛かる。

咄嗟に私は左腕で頭を庇う。

ザシュッ！！

「グアアッ！！」

……痛い……眼を開けると、私の左腕は斬られていて地面に落ちていた。

「ゲヒヤヒヤッ！！これで終わりだな孫堅ッ！！死ねえッ！！」

黄祖が私に斬り掛かろうとした。

「そうはさせるかよッ！！」

ザシュッ！！

「ゲパアッ！！」

その時、黄祖の首が吹き飛んだ。

「間に合ったか」

まだ死んでいなかった孫堅を見て安堵する。

「焰耶ッ！！思いつきり暴れるッ！！」

「初めからそのつもりだッ！！」

焰耶が伏兵を散らしていく。

「大丈夫か孫堅？」

「あ、ああ。お前達は？」

「なに、ただの旅人や」

俺は切断された左腕に包帯を巻く。

「ウッ！！」

「少し我慢してな……ファーストエイド」

切断された左腕（肘）にファーストエイドをかけて血を止める。

「血が……」

「大丈夫や。左腕を斬られた以外はな」

「……それは仕方ない。戦場での傷なんだ」

孫堅が笑う。

てかほんまに孫策を大人にしたバージョンやな。

「堅殿オーーッ!!」

「祭の声だ……」

さて、そろそろずらかるか。

「焰耶。そっちは？」

「あらかた片付けたぞ」

「了解。それじゃあな孫堅」

俺と焰耶は馬に乗る。

「あ、待てッ!!お前の名前は何だ？」

「姓は王。名は双や」

「……王双。助けてくれてありがとう」

孫堅は俺に頭を下げた。

「なに、気にするな。んじゃあな」

俺と焰耶はそのまま立ち去った。

「堅殿ッ!!無事であつたか……と、それは……」

「祭、済まなかったな。左腕を黄祖に取られた」

「いや、堅殿が生きているだけでもよかった」

「……………王双……………」

私は二人が立ち去った後を見ながら祭達と陣営に戻った。

「さあて、次は何処に行こか」

「私は何処でもいいぞ」

馬に乗りながら考える。

……………ん？確か……………。

「確か南陽太守は袁術やったな？」

「ああそつだぞ」

「なら南陽に行つて、袁術の元で客将でもするか」

「何故だ？」

「ん？だって袁家やと給金は高いやろ？」

「……納得した……」

焰耶は苦笑した。

そして俺達は南陽へ向かった。

「あれが南陽やな」

あれから一週間の時が流れたけど、何とか路銀が底をつく前に到着出来たな。

……ん？

「何やあれは？」

「どれだ？」

俺達から五百メートル程離れたところに百名程度の軍勢と少女と女性がいた。

「うーん……あれはッ!？」

「お、おい長門ッ!!」

俺は少女と女性を漸く思い出して馬を軍勢に走らせた。

——??SIDE——

……これは失敗しましたね。まさか文官の韓胤までもが裏切ってたなんて……。こんな事になるなら素直に零さんの言うことを聞いとけばよかったですね。

「さぁどうしますか張勳殿？我等に従うと宣言すれば愛しい袁術様を返しますよ。くつくつく……」

武将の雷薄が私に尋ねてくる。

「……………」

「おやおやだんまりですか？なら、袁術様は少し痛い目に会わないといけないですね」

ニヤニヤしながら同じく武将の楊奉が美羽様に突き付けている剣を喉元に突き付ける。

少し刃が喉に当たったのか血がツウっと流れ出ている。

「な、七乃お……」

「御嬢様ッ！！」

くッ……やはりここは従うしかないですね。

私はそう思い、構えていた剣を地面に突き刺そうとした時、御嬢様に剣を突き付けていた楊奉の首が飛んだ。

そしていつの間にか妙な刀剣を持った私くらいの歳の男がいた。

——張勳SIDE終了——

第六話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm（――）m

第七話（改）（前書き）

総合評価が三日で606ポイント……。マジでありがとつございますm(_____)m

今回は（仮）でもあった美羽と七乃との出会いです。美羽が馬鹿じゃないので。

第一話は改訂しました。

第七話（改）

——長門SIDE——

おゝ、やっぱり首って人体の中で一番弱いてほんまやねんな。

まあそれは置いて。

……やっぱり少女と女性は袁術と張勳やったか。

張勳は好きなキャラやから感動もんやわ。

「き、貴様何者だッ?!」

ちい、人が感動してんのにうぜってえ奴らやな。

「おめえらに名乗ったて意味ねーやろ。どーせ今から死ぬんやしな」

そついうと俺は袁術を抱え、張勳の元に行く。

「御嬢様ッ!!」

「七乃おゝ、恐かったのじゃ」

二人が抱きしめあう。

「フン。どうやら貴様はこの場を見ていないのか？」

文官っぽい男が右腕を上げると三十くらいの兵が俺に槍を向ける。

「どおうりやあああーッ！！！」

そこへ焰耶が軍勢の後ろから攻撃を仕掛ける。

「な、何だッ！？」

「後方からまた単騎での攻撃ですッ！！」

「な、何イツ！？」

「おいこら、よそ見すんなよッ！！」

「なッ！？」

一瞬の隙をついて、文官の首を狩った。

「焰耶ッ！！残りは兵士だけやッ！！叩き潰せッ！！」

「おうッ！！」

そして、少女と女性が見守る中、百名程度の軍勢は壊滅状態になる。

そこへ、南陽から砂埃と共に新たな軍勢が来た。

「あ、零じゃッ！！」

袁術が『紀』と書かれた牙門旗を見てはしゃいでいる。

「『紀』？……ああ紀霊か」

「……ッ！？何故紀霊さんを知っているんですかッ！？」

七乃がつかみ掛かるように俺に問う。

「まあ三国志を見たからな」

「三国志？」

「後で教えるわ」

「美羽様ッ！！七乃ッ！！無事かッ！！」

現れた部隊から一人の女性が叫びながらこちらに来た。

「おおッ！！二人とも無事であつたか。……ん？お主らは誰だ？」

黄蓋のようなボンキュボンのお姉さんが話し掛けてくる。

「零、この二人は妾達を救った命の恩人じゃ」

「おおそうでしたか。僕は紀霊。美羽殿に仕えておる」

「俺は姓は王。名は双です」

「そうじゃ。妾達も名乗ってはおらんかったのう。妾は袁術、真名は美羽じゃ。南陽大守をしておる」

「お、お嬢様ッ！？真名も言つのですかッ！！」

張勳が驚いてる。

「何を言つのじゃ七乃。織田は妾達を助けてくれた。それに何やら織田は面白そうじゃからのう」

「お、お嬢様」

…………袁術てこんな性格やったけ？

「それなら俺も真名は長門や」

「私は魏延。真名は焰耶だ」

「おおそつか。ほら七乃も言つのじゃ」

「…………お嬢様がそこまで言つのであれば。私は張勳、真名は七乃です」

「ところで長門と焰耶。何故南陽に？」

「ん？いやあ、そろそろ路銀も底を尽きそうやったから美羽の元で客将でめしよつかと思つてたんや」

「成る程のう。ならやってもいいが、その代わりに条件があるのじゃ」

「条件？」

「うむ。まあその事は城に戻って言うのじゃ」

「先程は真名を言えなかったな。儂の真名は零じゃ。受けとってくれ」

「ありがとうな零。俺は長門だ」

「こちらこそ。私は焰耶だ」

「さて、真名の交換も終わったところで条件をなんじゃが……妾達と鼠退治をしてほしいのじゃ」

「鼠退治やて？」

「お、お嬢様。まさか………」

「そのまさかじゃ。妾は今が好機とみておる」

「……………どういう事や？」

俺は七乃に尋ねる。

「あ、はい。御覧の通り、お嬢様はまだ幼少のため政治の全てを理解しきれません。そこへ自分の腹を満たす事しか考えてない文官の韓胤や武将の雷薄達がお嬢様を人質にして我々を脅しているのです」

昔も今と変わらんなあ……。

「分かった。そういう鼠退治なら任せろや」

七乃は俺の言葉に涙を流した。

「ありがとうございます長門さん……」

「てかさ、美羽に忠誠を誓ってるのは七乃と零だけなん？」

「……残念じゃが、儂と七乃以外は美羽様を暗殺するような輩だけじゃ」

零が俺に詳しく話す。

「そうか……。ならさ七乃、一か八かの賭けをしてみいひんか？」

「どんなの賭けですか？」

俺は七乃に耳打ちをする。

「……まさに一か八かですね。ですがやってみる価値はありますね。」

やってみましようッ!!」

七乃は零と美羽に詳しく説明する。

二人も意気揚々として準備に取り掛かった。

「てか展開早くね？」

それを言うな。by 作者

翌日、李豊、楊弘以外の文官、武官が緊急召集された。

内容は『袁術が病で倒れた。もって後、数日の命。袁術は後継者を決める』と使者が伝え、自分の腹を満たす事しか考えない武官や文官達はウキウキしながら集まった。

だが、それが彼等の命取りとなった。

第七話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm
——
）m

第八話（前書き）

（仮）からの使いまわしとか言わないで（滝汗）

小説がいつの間にか日間ランキング第四位………何があつたんや……。

それと、長門の名前である織田信長を変えようと思います。

一応、候補に上がっているのは王双、張翼、飛燕、関索などです。
（個人的には王双か飛燕）

王平と関平は使うキャラがいますので。

飛燕は旧陸軍三式戦闘機『飛燕』から取りました。

第八話

「袁術様。ご気分は如何ですか？」

文官の舒邵しゅうしょうが病のフリをしている美羽に尋ねる。（てかフリに氣づいていない）

「うむ……周りが霞んでおる。どうやら妾はもう駄目なようじゃ」

「そんな事をおっしゃらないで下さい殿」

武將の梁綱りやうこうが美羽を励ます。

「いや、妾の身体は妾が一番分かるのじゃ。だから死ぬ前にお主に頼みがあるのじゃ」

「何ですか？何でもおっしゃって下さい」

「なら……全員死んでくれ」

『……はい？』

美羽の言葉に文官と武官の目が点になる。

「じゃからここにいる全員死んでくれと言っておるのじゃ」

美羽が寝たまま右手を上げるとバタンッ！！と扉が開き、武装した兵士が出て来た。

「ーーーーッ！！こ、これはどついう事ですか殿ッ！！」

舒邵が美羽に詰め寄る。

「てめえらの企みは全てばれてんだよ」

美羽の寝ているベッドの近くの柱から俺達が出た。

「舒邵以下腐った文官、武官を全員粛清するのじゃッ！！」

美羽の言葉に兵士達が舒邵達に矢を向けて放った。

ヒュンヒュンヒュンッ！！

ドスッ！！ザシャッ！！グサッ！！

「ギャアッ！！」

「ぶげらッ！！」

「グヘエッ！！」

兵士達から放たれる矢に武官、文官達が次々と力尽きていく。

「くそお……こうなれば袁術もろとも道連れだッ！！」

梁綱は隠し持っていた短剣を出して美羽に斬りつけようとした。

「美羽様ッ！！」

七乃と零が叫んだ。

「そつは問屋がおるすかいなッ！！」

俺は美羽が斬りつけられる刹那に美羽を庇う。

ザシュッ！！

「ちッ！！」

いてーな糞がッ！！

俺は美羽を七乃達に投げた。

「妾が飛んでる」

解説ご苦労さん。

「美羽様、大丈夫ですかッ！！」

「妾は大丈夫じゃ。しかし、長門が……」

「おのれ小僧がッ！！」

梁綱が短剣で俺に斬りかかる。

俺は何とか避けて、短剣を持つ手を斬った。

ザシュッ！！

「ぐッ！！」

カランッ。

梁綱が短剣を落とした。

「今度はこっちの番やッ！！」

「ガッ！！」

虎牙破斬で梁綱を斬り上げて斬り下ろす。

「まだまだアッ！！連続やアッ！！」

「ガッ！！ぷえッ！！ぱえッ！！あべしッ！！」

連続して虎牙破斬を繰り返していくと、梁綱は大きな肉片となった。

「ふう……………」

俺は息を吐く。

「長門オッ！！」

ドオンッ！！

「ブホウツ!？」

美羽が俺にタツクルをかましてきた。

「長門、大丈夫かや？痛いところはないのか？」

美羽が大阪のおばちゃんのようにマシンガン Took をかます。

「美羽、俺は大丈夫や。少し右腕が斬られたけどな」

二の腕が綺麗に斬られているが右腕が無くなるとかそういうのではないな。

「ふむ、すぐに医師に見せたほうがよからう。誰か医師を呼んでこいッ!！」

零が俺の二の腕を見て、そう判断する。

「（ヒールとかファーストエイドを使えばええねんけどまあええか）」

「とりあえずは反乱を抑える事が出来ましたが、当分の間、文官や武官の数が足りませんね」

七乃がハアと溜め息をついた。

「まあ俺も両方回るからガンバ」

「長門さんには感謝しきれませんね。この策も長門さんが考えまし

たしね」

無茶苦茶今さらやけど、この作戦を思いついたのは俺。

てかあんなに上手くいくとは思わなかったけどな。 f ^ | ^ ;

「何はともあれ長門と焰耶のおかげなのじゃ。長門、妾は心から我が袁家に來た事を感謝するのじゃ」

美羽が頭を下げた。

むろん、零や七乃、兵士達もだ。

「こちらこそよろしくな美羽」

俺は美羽と握手した。

「……私……活躍してなかったな……」

……頑張れ焰耶。

俺は焰耶にそう言える事しか言えなかった。

第八話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm（
）m

第九話（改）（前書き）

とりあえず、長門の名前は王双で行きます。

最後にテイルズキャラ出ます。

第九話（改）

「ん〜。よう寝たなあ」

俺は大きく背伸びをした。

昨日はようけあったわほんまに。血の臭いとかしてへんやろな？

「それにしても、ゲームとは大分美羽達の性格が違うな……」

昨日会った美羽、七乃、零の三人。

「零は恋姫におらんかったけど、雰囲気は黄蓋やな」

俺はそう言いつつ私服に着替える。

まあ右腕はまだ包帯巻いてるから着にくいけどな……。

「おう美羽、七乃お早う」

食堂に向かう最中に美羽と七乃に出くわした。

「お早うなのじゃ長門」

「お早うございます長門さん」

二人が俺に挨拶をしてくる。

「今から朝メシか？」

「はい、長門さんも食べますか？」

「おう」

俺達は朝メシを食べた。

「今日は七乃達、文官を手伝うわ」

「なんじゃと？長門、儂のところに来い」

零が不満げに顔を膨らます。

……やべ…可愛ええ……。

「そうしたいけど、まだ腕も完治してないしな。代わりに焰耶と頼むわ」

「むう、仕方ないのう。焰耶と鍛練でもするか」

零は諦めて薙刀を持って訓練所に行った。

「長門さん、本当に袁術軍に入ってくれるんですか？」

「そうやけど、何で？」

「いえ、普通なら孫堅さんとかもつと力が大きいところに行けると
思うので……」

「一応、董卓のところで張遼の副官をやったけどな。まあ少しの
間やけど」

「何で董卓さんのところを辞めたのですか？」

「ん、もうちょい色んな国を見ていたかったのが本音やな」

「へえそうなんですか。なら最近、曹操とかいう人も中々いいみた
いですよ」

「あんな百合なところに行きたくない」

あの阿呆は、俺がまだ屋敷にいてた時から色んな女とやってたか
らな。

最悪、四六時中は曹操の部屋から喘ぎ声が途絶えなかった。（ま
あ夏侯惇の声が多かったけどな）

「何か曹操さんとあつたんですか？」

「いや何も無いな」

「……………分かりました」

七乃が何か察したのか頷いた。

「ああそれで美羽の軍に入った理由だけど、何か美羽が可哀相でな。つい助けたくなったんだ。それに美羽の将来性も期待してるからな。なんたつて、美羽を支える可愛い大將軍がいるからな」

「もう、からかわないで下さいよ長門さん」

七乃が顔を赤らめる。

いやまあ事実なんだけどね。

「まずは、年貢の状況やな。七乃、年貢の取り分はどうなってるんや？」

「年貢を10としますと、半分ずつの五公五民としていますよ」

「……………いや多分違うな。多分、舒邵達が増税しと思うから調べてみたら？」

七乃も頷き、部下に調べさせた。

そして一刻程で報告がきた。

「……………八公二民で何て事をしていたんですかあの人はッ?!」

思わず七乃が机を叩いた。

「七乃は気づかなかったんか？」

「舒邵達が何かをしていたのは知っていましたけど、美羽様を守るので精一杯でしたので……」

「まあそれはしゃーないな。とりあえず年貢の取り分は四公六民に変更な」

北条早雲のパクリやね。それを詳しく知りたかったらウィキで。

「五公五民ではなくていいんですか？」

「民の信頼を無くしたら国は滅びるからな」

「確かにそうですね」

七乃が頷く。

「食糧は倉庫に有り余つとるやろ？食糧事情が苦しい農民に分け与えないとな」

「そうですね」

そうしてあれやこれやで溜まっている書簡（でええんか？）が無くなっていく。

あ、そうや。

「七乃、屯田兵を作ろうや」

「屯田兵……ですか？聞いた事ない言葉ですけど……」

「まあそうやるな。俺が考えたからな。屯田兵てのは普段は農民と同じように田畑を作り、戦時は兵士として働くというのや。もしくは浮浪者や牢に入った犯罪者を使つてするのかな」

「成る程……それはいいですね」

明治時代の日本の北海道で行われていた屯田兵の事やけど、間違つてたら作者まで言つてな。

「後は金銭面やけど、兵士の鎧は廃止やな」

「廃止て長門さん……（……）」

「別に裸で戦えちゃうで？俺も鎧を着て戦つた事はあるけど、重くて動きにくいからな。一応、鎧も考えてるんや」

「どんな鎧ですか？」

「機動力を重視した鎧やな」

「機動力重視の鎧ですか？」

「ああ、戦てのは時間との勝負でもあるからな」

まあこれは俺の考えやけどな。

とまあそんなこんなでいつの間にか夕方近くになっていた。

「長門。いるかの？」

「どうしたんや零？」

食堂にメシでも食べに行こうとしたら部屋に零が入ってきた。

「これから舒邵達の屋敷を家宅捜査するんじやがお主も来るかの？」

「ああ行くわ」

多分、まだ不正していたのがありそうやな。

「じゃあ私はお嬢様と夕飯を食べますので」

「おう」

——舒邵宅——

「徹底的に調べるんだッ！！」

零が兵士達に捜査の指示を出している。

「王双様。こちらの倉を……………」

兵士が俺に駆け寄ってきた。

「倉？」

「は。その……………奴隷がおりまして……………」

兵士が答えにくそうに言う。

「……………分かった。行くわ」

「すみません」

「いやええよ」

「これがその倉か……………」

中に入ると、首を鎖で巻かれ、ほぼ裸の女性達が多数いた。

「直ぐに鍵を探せ。お前らは女性達を保護や。何か布でも身体を隠せる物をかけてやるんや」

『はッ！！』

俺の命令に兵士達が動く。

「ん？」

ふと、倉の奥に視線を向けると二人の女性がいた。

「おい。大丈夫……夫……」

……………嘘やろ……………。

その二人は本来ならこの世界にいないはずだった。

一人は帽子を被って裸やけどあの顔はかなり見覚えがある。

もう一人も裸やけど、ピンク色の髪をしてポニーテールに近い髪型をして見覚えがある、ゲームでな。

「……………クロエ・ヴァレンス、カノン・グラスバレー……………」

……………何でテイルズの二人がこの世界におんねん。（滝汗）

第九話（改）（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm
——
）m

第十話（前書き）

さてさて、クロエとカノンの登場です。

屯田兵は明治時代の日本で行われていた屯田兵の事を指しています。

ややこしくてすみませんm(_____)m

F―X……F―35……仕方ないと言えば仕方ないかなぁ。自分はタイフーンがよかったけど。

第十話

「……ちょっと失礼。貴女達の名前はもしかしてクロエ・ヴァレンスとカノン・グラスバレーかな？」

俺は二人に近づき、出来るだけ優しく聞いた。

「ッ！？」「」

あ、二人が驚いたという事は……。

「本物かよ……」

俺は深い溜め息を吐いた。

……神様よ、なんつう事してくれんのや。

「……貴様は、私達を知っているのか？」

クロエが驚きながらも俺に聞いてきた。

「まあ……一応はな」

「あ、あのッ！！此処は一体何処なんですかッ！！」

「そうだ、ヴェラトローパで変な機械が作動して気がついたら此処にいたんだッ！！」

「ちょ、一気に喋るなッ！！てかその前に何か着ろッ！！」

「「え……あ……」」

二人は自分の服装を見て顔を赤くした。

二人の服装はところどころ破れていたりしてるんやな。

「とりあえず此处で話すより城に戻って聞くから」

二人に服を着させて、零達と城に戻った。

「さて、話してもらおうか」

俺は二人を部屋に入れた。

「ああ。私とカノンノはルミナシアという世界で空を駆ける船、バンエルティア号を拠点に活動するギルド『アドリビトム』のメンバーだ」

……成る程、マイソロ3か。

「それでいつものように、ヴェラトローパでクエストをしていたんだ」

「私とクロエ、ロッタ、しいなでロックスもいたんだ」

「私がメデューサーパーを吹き飛ばしたら一部が破壊してしまっ
たんだ。そしたら急に他の機械が動き出して視界が真っ白になって
……」

「……そして気がついたら此処にいたわけ……か……」

ヴェラトローパにそんなのあったか？

「まあ……うん。アドリビトムにカノンノ・イアハートはおるか？」

「うん、いるよ」

「それやったら大分説明は省けるな。まあこの世界はルミナシアと
は違う世界やな」

「というとイアハートの世界か？」

「いやいや、イアハートの世界でもない。むしろ、この世界には世
界樹も無いからな」

「えッ！？そうなんだ……」

カノンノが驚く。

「少し聞きたいんだが、貴様の名前は？」

「ああ忘れてたな。俺は王双や。すずやしいなと似たような名前と

思えばええよ」

「成る程。それでは王双。何故、私達を知っていた？私は王双をル
ミナシアで見た記憶は無い」

「あ、私もだよ。何でなの？」

「……………言つか。」

「……………信じられへんかもしれんが……………」

そして俺は全てを話した。

この世界と俺の前世も含めてな。

「……………正直信じられない話だな……………」

「でも私達の事を知っていたよ」

「まあゲームでだけだな」

「だが……………私達はこれからどうしたらいいんだ？」

「うゝん。何個か案はあるな」

「何ですか？」

「一、ルミナシアに帰る方法を探す。二、帰る方法を探しつつうちの軍に入って金を貯める。三、俺の嫁へ。四、諦めてこの世界で暮らす」

「……………おい。三は一体何だ？」

「すいません冗談です」

クロエに剣を突きつけられる。

マジで背中がゾクツとしたわ。

「まあ三は置いといて。どうするんだ？」

「……………三は置いとくんだ……………」

何かカノンノが言ってるけど知らん知らん。

「一と四は分かるが二は？」

「ルミナシアに帰るまでに衣食住はどうするんだ？まさか俺が払うとでも？三人を養う給金は無いが？」

「……………二で……………」

……………だろっなあ。

「真名の意味は分かっているやろな？」

「それは分かっている」

「うん」

「真名はクロエとカノンノになるからあまり教えるなよ？」

「それは分かるけど、私達の名前はどつするの？」

「そりゃあ偽名しかないやろ」

「なら長門が付けてくれ。私達では分からない」

「分かった。なら………」

何にしようかな……。

「ならクロエは王平な。んでカノンノは関興やな」

ぶっちゃけ横山三国志の王平と関興な。

あの二人は好きやしな。

「分かった。よろしく頼む」

「よろしく願います長門さん」

「ああ」

三人で握手をする。

「とりあえず、美羽達に自己紹介でもするか。明日からこの世界の

文字も覚えてもらっしな」

しかしまあ、この世界はどうなってんやろな……。

第十話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm
——
m

第十一話（前書き）

二百三高地を録画したのに忙しくて見れてない……。

今日こそは見よう。

ユーチューブで孫策の最期の大号令に半泣きします。

第十一話

「……ん……」

朝日の光に俺は目を覚ます。まだ6時くらいだな。

ベッドにはカノンノとクロエが寝ていた。

言つとくけど俺は床で寝たけどな。ほんまだからな。

「……………」

俺は二人を起こさないように部屋を出た。

「……はぁ……はぁ……」

俺は鍛練所で腕立て伏せや背筋などの筋トレをしていた。

俺はチートやないから戦場で死ぬ可能性はあるからな。

いつもは焰耶達とやっているけど、今日は休みだ。

「さあて、朝メシでも食うか」

筋トレが終わった俺は食堂に向かった。

—— 食堂 ——

「お、美羽、七乃。お早う」

「お早うなのじゃ長門」

「お早うございます長門さん」

食堂に行くと美羽と七乃が朝メシを食べていた。

「あ、美羽。新しく紹介したい奴がいるんだけど……」

「その紹介は昨日、長門が助けた二人かや？」

「……情報はいえな。」

「まあな、助けた二人は俺の親友でな。元々は西方の商人の娘なんだけど、西方で起きた戦争から一家がこっちに逃げてきたんだけど途中で盗賊に捕まったらしいんだ。それで奴隷に売られて舒邵の倉におったというわけ」

「成る程のう……よし、構わないのじゃ。長門の部下として上手く入れといてやるのじゃ」

「いいんですかお嬢様？そんな簡単に……」

「何かあれば長門の責任になるから大丈夫なのじゃ」

「……………（意外と腹黒いな）」

七乃の影響やろか……。

「まあ朝メシ食ったら会わせるわ」

「分かったのじゃ」

急いで朝メシを終わらして二人分の朝メシを貰って部屋に向かった。

「朝メシやで」

「あ、ありがとうございます」

「済まないな」

部屋に入ると二人は椅子に座って俺の帰りを待っていた。

「一応、ここの領主には言ったから朝メシ食ったら挨拶に行くかな」

「ああ」

「はい」

二人は頷いて朝メシを食べはじめた。

——玉座——

「お主らが長門が言っていた二人かや？」

「ああ。右から王平と関興や」

「「よろしくお願いします」」

二人が美羽に頭を下げた。

「うむ、妾は袁術で真名は美羽じゃ」

「私は大將軍の張勳で真名は七乃です」

「儂は紀靈で真名は零じゃ」

「私は魏延で真名は焰耶だ」

皆が二人と挨拶をする。

「私は王平で真名はクロエだ」

「私は関興で真名はカノンノです」

「ふむ。カノンノとは珍しい真名じゃのう」

零が言う。

「まあ二人は西方の人間だからな。俺らとは違う真名なんだろう」

「成る程のう」

零が頷く。

「そついえば二人は武官かの？」

「ううゝん、クロエは武官やるなと思うけどな。カノンノも一応は戦えるけど多分、人は斬った事無いと思うからな」

確かクロエはマイソロ3では戦争の最前線におつたらしいからな。

「成る程のう。後でクロエと鍛練でもするか」

「……………」

バトルマニアやるか？

「そついえば零さん。何か報告があるんじゃないかなかったですか？」

七乃が思い出したかのように言う。

「おおそうじゃ。最近物忘れがあるからすっかり忘れておったわ」

「……………ボケか？」

「長門、何か言ったかの？」

首下に零の薙刀がそえられた。

「……………何も言ってますん……………」

「長門さん。それを言っちゃあ……………」

カノンノが冷や汗をかいている。

「全く……………実は先日、反乱を鎮圧したんじゃがその時の賊が頭に黄色の布を巻いておった」

零が皆に黄色の布を見せた。

「ふむ。賊にしては珍しいのう」

「カノンノさん達のところではこんなありました？」

「い、いや。私は反乱兵を見てきたが、布を巻いた反乱兵は見なかった」

「いいえ。私も見てないです」

いきなり七乃から声をかけられたクロエが一瞬、言葉をつまりながら答えてカノンノも首を横に振る。

……これって黄巾の乱やな。

「まあとりあえずは何時でも動ける部隊を作って警戒するしかないやろな」

俺の言葉に美羽達は頷いた。

漢王朝の終わりが近づいていた。

第十一話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしておりますm（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2622z/>

曹徳の奮闘記

2011年12月15日09時50分発行